

2022年8月  
1169号

# 百葉

Manyoh

一冊の会 編集部

〒160-0015 東京都新宿区大京町5

(一冊の会研究室)

## 尾崎行雄に学ぶ政治家の条件・有権者の心得

一冊の会の理事長であり、尾崎行雄記念財団の理事・事務局長である石田尊昭さんが書かれた『政治家の条件—議会政治の父・尾崎行雄に学ぶ「有権者の心得」—』が5月に出版されました。それを記念し、8月27日土曜日、憲政記念館（代替施設）で「出版記念の集い」が開催され、一冊の会メンバーもお祝いにつけました。

憲政記念館は、尾崎行雄記念財団が寄付を募り全国から寄せられた浄財で建設され、完成と同時に衆議院に寄贈されました。その後新館が増築され「衆議院 憲政記念館」となり、現在に至っております。その憲政記念館が建て替えのため今年1月末から休館し、5月下旬から工事が始まりました。建物は全て解体され、2028年に「新たな国立公文書館」とともに新・憲政記念館が完成予定です。それに伴い、「憲政記念館・代替施設」がすぐ近くの国会参観バス駐車場横に造られ、6月2日に開館。一緒に尾崎行雄記念財団の事務所も移転しました。代替施設は、あくまで一時的なもので、延床面積もこれまでより小さく、展示物も少なくなりましたが、随所に工夫が施され、見やすく、分かりやすく、子供から大人まで楽しめるような作りになっているとのこと、集いの前に3歳の娘と共に見学させていただきました。確かに移転前に比べると展示物は少なくなりましたが、ワンフロアにまとまっております展示ケースも整備されてスッキリしておりました。娘は子供向けのクイズのパネルをめくったり、国会の本会議場を4分の3スケールで再現した演説台に上る階段を上り下りしたりと何だか楽しそうにしていました。



出版記念の集いには、一冊の会の他、罌堂塾のOB団体の方や尾崎行雄を全国に発信する会など大勢の方がお祝いにつけご挨拶をされておりました。最初に、一冊の会の大槻会長が石田さんに祝辞を述べ、会長と一冊の会メンバーから真心のプレゼントを石田理事長に贈りました。また、一冊の会出身でもある高木美智代 前衆議院議員も駆けつけ、祝辞を述べられました。

尾崎行雄の生涯についてまとめた映像を視聴したあと、石田理事長が講演をされました。以下、抜粋してお伝えします。

### 講演「尾崎行雄に学ぶ政治家の条件・有権者の心得」(石田尊昭尾崎行雄記念財団理事・事務局長)

2020年、今から2年前は我が国にとって議会開設130年という節目の年でした。本来であれば、その時にこの本『政治家の条件—議会政治の父・尾崎行雄に学ぶ「有権者の心得」—』を書き、広く世に発信したかったが、新型コロナのパンデミックが始まったことや移転の準備が重なりできませんでした。事務所の移転は、たった徒歩1分ではありますが、60年分の荷物を移すことは大変でした。無事移転し、本も出版できました。皆さんの力に支えられ書き上げた本だと思っています、多くの方に広めていただきたい。

この2年間、日本の政治は大変難しい判断を迫られてきました。政治家に求められる事は、信念をもち明確な根拠を示しながら自分の言葉で語りかけること。これがないと国民の信頼も納得も協力も得られない。議会政治の父と呼ばれた尾崎の言葉・姿勢・信念・生き方を伝える必要があると思えば本を書いた。

尾崎行雄は第1回衆議院選挙で当選してから連続当選25回、60年7ヶ月の議員生活、これは未だに破られていない偉大な記録ですが、記録だけで尾崎行雄を語るのはもったいない。彼が「憲政の神」「議会政治の父」と呼ばれているのは、その生き方・信念をこれからの世に繋ぐべきと多くの人が考えているからそう呼ばれているから。

尾崎の一番の特徴は「誰が正しいかではなく何が正しいか」を考えた政治家だったということ。尾崎は先入観を一

切廃し国家国民のために今本当に歩むべき道は何かを自分の頭で考えた。そのためには、公平なもの見方、筋道を立てて論理的に考えることが大切だと尾崎は言った。

公平に物を見ることは難しい。ついつい自分の仲のいい人にはいい顔をしたくなる。しかし政治家がそれをする社会も政治も国も非常に大きな損失を生む。政治というのは限られた資源をどこにどう配分するかを決めていかなければならない。その時には利益を得る人ができるが利益にあずからない人がある。えこひいきしては政治に対する国民の不信が増幅する。尾崎が司法大臣を務めた時、同僚の大浦に議員買収という問題が上がり、極めて厳しい態度で臨んだ。尾崎は、ちょっとでも身内に身びいきしてしまえば司法が死ぬと思った。また、尾崎が大隈重信の元を離れ伊藤博文の元へ行った事は裏切りのように見えるかもしれないが、尾崎にしてみれば忠誠を誓ったのは国家国民であり、国のために何ができるかを公平に考えたから、恩師にだって間違っていることは間違っていると言った。今の政治家どれだけ言えるか。そういう政治家を我々は選んでいかなければならない。尾崎は極めて論理的で、私利私欲がなかった。

もう一つ大事な尾崎の精神は「公共心」。これがずっと尾崎の根底にあった。国民の生命・財産・自由を守るためにどういう法律や政策が必要なのか、簡単に言えば「世のため人のため」ということ。尾崎が晩年に詠んだ歌に「国よりも党を重んじ党よりも身を重んずる人のむれかな」というものがある。当時の政党や政治家に対して放った歌ですが、70年前の尾崎のこの歌が今にも通じるとしたら悲劇であり、我々国民の怠慢です。

尾崎の信念は、立憲政治を確立することによって 国外に対しては文明国としての地位を確立すること、国内において個人が自由に競争して発展していくことだった。亡くなる晩年までこれを唱え続けた。この非常に強力な信念から生まれる言葉は力がある。生き馬の目を抜く演説をすると言われたが、その演説に力を与えているのは、身振り手振りやテクニックではなく信念の強さである。1人でも多くの人に伝えたい、その一心が演説に力を与えた。

尾崎は首相にはならず、与党にいたこともあったがほぼ無所属だった。いわば在野の政治家だった。権力に迎合することはなく、たまにいい話があっても国民のためになるかと考え断った。権力に迎合しないだけでなく大衆に迎合しなかった、むしろ極めて厳しいことを言い続けた。1945年12月、尾崎は宮中に招かれたときに一句「今日は御所きのうは獄舎あすはまた地獄極楽いづち行くらん」と詠んだ。自分の政治的主張は変わらないのに、3年前には不敬罪で拘留所にいれられ、戦後は手のひらを返したように憲政の神、平和主義者ともてはやされる変化に危うさを感じた。戦争は天皇が悪い、軍部が悪い、いや政党や政治が悪いと言い、選んだ自分たちの責任は棚上げに、未だにしている。今日のお話を聞いて「尾崎行雄に比べると最近の政治家はダメだな」などと思って帰っては全く意味がない。我々がそういう政治家を選んだ。政治家は自らを厳しく律しなきゃいけないし我々がチェックしなくてはいけない。しかし金権政治はおこぼれにあずかる人がいて成り立つ。今の政治が間違っているというのなら我々が間違っている。民主主義は厳しい制度だということを尾崎は言い続けた。この本は『政治家の条件』というタイトルですが、すなわちこれ有権者の心得だということです。尾崎の真骨頂はそのことにあります。

尾崎と憲法についてですが、尾崎をだしに使って憲法を守れとか変えろというのは間違っている。尾崎は大日本帝国憲法も日本国憲法も素晴らしいと言った。どちらも立憲的に運用さえすれば素晴らしい民主的な運用ができたが、それができなかったのは国民の責任だと。尾崎は、なぜ大日本帝国憲法を大事にして立憲的に運用できないのか、あの憲法さえ運用できない日本人が日本国憲法を手に入れても豚に真珠だと笑った。尾崎にとっては憲法は道具、運用は我々の手に委ねられている。政治家は我々の映し鏡ですから、我々がこういう政治を望んでいるというものが無くぼんやりしていれば、政治家もぼんやりしています。尾崎の言葉は、どこまでいっても厳しさがつきつけられる。

私が話したことのうち1つでも2つでもいい、納得したなということがあれば帰って周りの方に話してほしい。我々尾崎財団は60年歩んできたが、これからの未来を皆さんと作っていきましょう。

尾崎行雄記念財団のYouTubeチャンネルで講演の様子が紹介されています。是非ご覧ください。

<https://www.youtube.com/watch?v=rIPzqYPE9g8>

政治家を選んだのは有権者であるということをかみしめていかなければと思いました。最後に、石田理事長と一冊の会メンバーで記念写真撮影させていただきました。ありがとうございました。

文責：赤田主任研究員

